

武生市の歴史的建築(1)掛所の前身建物について

吉 田 純 一* ・ 中 川 理 沙**

The Historic Architectures in Takefu City (1) The Original Building of Kakesyo

Jun-ichi Yoshida and Risa Nakagawa

This paper deals with the original building of the 'Kakesyo' that is the Betsuin of Gosyoji temple in Takefu city. We make clear that the original building of the 'Kakesyo' was the house of 'Saito-Family'. Saito-Family was the doctor of the Honda clan which was the lord of Futyu han. Its house was built at the fifth of Tenmei (1785) in the late of Edo period.

1. はじめに

武生市内にある掛所は、真宗出雲路派本山毫摂寺（武生市清水頭）の武生別院として使用されている寺院建築である。しかし、もとは代々、府中本多家に仕えた藩医斎藤家の住宅であったといわれている⁽¹⁾。

本稿は福井県建築士会南越支部（支部長三田村久治）の会員有志とともに、平成10年11月から翌11年2月に行なった掛所の建築調査を踏まえながら、この建物が言い伝えの通り、もと藩医の斎藤家住宅であったかどうか、また、前身建物の建築年代や創建当初の状態および建築的特徴などについて検討する。

2. 敷地について

1) 城下図にみられる屋敷

掛所は武生の市街地のほぼ中央、天王町4丁目にある。市街地を南北に通る旧北陸道の一筋東側、通称「お医者通り」と呼ばれる通りに面している。その名の通り、この通りには、藩政時代に斎藤・縣・奥村・皆川・沢崎などの藩医の家がたち並んでおり⁽²⁾、現在も奥村眼科医院や天井歯科医院、中村病院などがみられる。

敷地は東西に細長く、通りに面する正面東側が約15.7m、奥行が約28.6mで、南側の中ほどから後方に南北5.2～5.7m、東西約16mほど張り出し部があるため、奥の西面は約21mあり、敷地面積はほぼ550m²である。

正徳元年(1711)および文化12年(1815)～文政5年(1822)の2葉の府中城下図⁽³⁾⁽⁴⁾におい

* 建設工学科 建築学専攻 ** 大学院生

て、この敷地に相当する所は、南側の大門町の東西筋の通りに面する町屋敷の北側に接してほぼ矩形に描かれ、ともに「侍屋敷（舗）」と記されている（図－1, 2）。この敷地の大きさは正徳の城下図に東側が10間5尺、西側が10間3尺、北側と南側がともに14間5尺とある。図の1間は6尺3寸であるから⁽⁵⁾ 東側が約20.6m、西側が約20m、北側と西側が28.2mになる。特に東側を除けば大きさも近似している。また、その位置から判断しても、現在の掛所の敷地は、江戸時代から大きな変動もなく、続いているとみなすことができる。

2) 斎藤策順家の屋敷

明治8年(1875)『越前国武生市街分間図』⁽⁶⁾には、同じ場所のこの敷地に「斎藤修一郎」とある（図－3）。彼は開成学校（東京大学の前身）を卒業し、米国ボストン大学に官費留学、その後行政官として外務大臣秘書や農商務次官などを歴任した人物である⁽⁷⁾。彼の家は代々策順を名乗り、府中本多家の藩医を務めた家であった。

また、嘉永4年(1851)『府中全町家順記』は、長尾権左衛門の先祖が町代役に作製、使用したもので、通り別に立ち並ぶ家々を順に記載した記録である⁽⁸⁾が、これには「天皇社地西側南より ○斎藤策順 ○斎藤宗兵衛 ○縣 道策 ○奥村良斎 ○皆川伴二（後略）」とある。天皇社とは現在、掛所の前に鎮座する八坂神社をさすとみられ⁽⁹⁾、この記載からその西側の最も南にあったのが斎藤策順の屋敷ということになる。この策順は先の修一郎の父である。彼は文政7年(1824)に生まれ、京に遊学して日野鼎哉に師事し、蘭方医学を修めた後、府中にもどって本多家の藩医を務め、眼科医が専門であった。そして、安政3年(1856)12月には武生の医学校思精館の蘭方都講に任じられ、八人扶持を受けていた⁽¹⁰⁾。

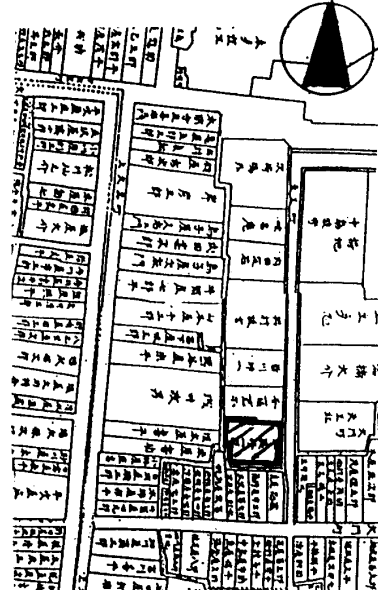
現在のところ、斎藤家が藩医であったことがわかる最も古い記録は、寛政9年(1797)『本多家家臣録』で、12名の医師の中に「斎藤策順」の名がある⁽¹¹⁾。この策順は年代的にみて、上述した策順、すなわち修一郎の父のさらに一代前の人物であろう。したがって、現段階では、少なくとも藩医としての斎藤家はこの策順の代、すなわち18世紀末まで遡ることができる⁽¹²⁾。



図－1 正徳元年の城下図



図－2 文化～文政期の城下図



図－3 明治8年の分間図

なお、斎藤家がその頃から現在の掛所の敷地にあったかどうかは確定できないが、藩医も本多家の家中に属し、給米や扶持を受け、侍たちと同じ様に本多家から屋敷を拝領していた。したがって、城下図に「侍屋敷」とある敷地が藩医の屋敷であったとしても矛盾はなく、ここに斎藤家が居住していたことも十分に考えられる。

3. 掛所の建築の現状

1) 掛所の建物

現在の掛所は、通り沿いの東側ほぼ中央に2本の門柱をたて、その両脇は瓦葺の土塀が続いている。門を入った正面にあるのが仏堂で、毫摂寺所蔵の図面によると、「会堂」と呼ばれている。この建物は、主要部が桁行6間、梁間5間、屋根は切妻造、棧瓦葺で、正面に1間幅、北側に1間半幅、南側に半間幅の下屋が付き、南半の後方に4間×5間半の別棟部を張り出している。そして北半の背面は母屋の流れをそのまま葺き降ろして座敷を設け、その先の北西隅には別棟の便所を設けている。さらに北側の前方にも別棟で居室部がついている。これら下屋や張り出し部もすべて棧瓦葺である。このようにこの建物は主要部に下屋や別棟部を複雑に設け、ほぼ敷地いっぱいになっている。なお、南側に張り出した敷地の一面には、前方に離れの便所があり、後方は数基の墓が置かれた墓地になっている。

主要部の外観をみると、正面の下屋上の壁面は白漆喰塗の大壁で、中央4間分に虫籠窓がついている。ただし、この窓は意匠的な要素が強く、北寄りの半間が開くだけである。そして軒裏の垂木や野地板なども塗込められている。南と北の妻壁は縦下見板張りであるが、けらばはやはり塗込めになっている。

2) 平面について

図-4は掛所の現状平面図である。正面の下屋はほぼ全面に上り縁が付き、仏堂の入り口になっている。これを入った前方の10畳2室とそれに続く8畳2室分の36畳分がいわゆる外陣に相当する。この奥、一段高くなった板敷部分が内陣で、左端の一面4畳分は余間である⁽¹³⁾。つまり、この外陣と内陣が掛所の中心空間である。

外陣と内陣の北側に奥に向かって1列に並んでいる4室の部屋は、客間や控えの間であろう。このうち最も表側の部屋は前方に建具2本引き違いの入り口があり、厨子二階への階段もみられる。奥の3室への玄関的な機能を持っていると考えられる。この室列のさらに北側に前方に張り出して土間・台所部があり、その後方に3室の部屋(6畳間)が続いている。これらはいずれも下屋に含まれている。

一方、内陣の西奥には廊下をはさんで8畳と4畳半の2室続きの座敷がある。今回の調査で、上方の小屋裏から棟札がみつき、この座敷部分は大正9年(1921)12月に新造された⁽¹⁴⁾ことがわかった。棟札には「御殿」とあるから、ここは賓客の接客や控えの間に当てられた座敷であろう。

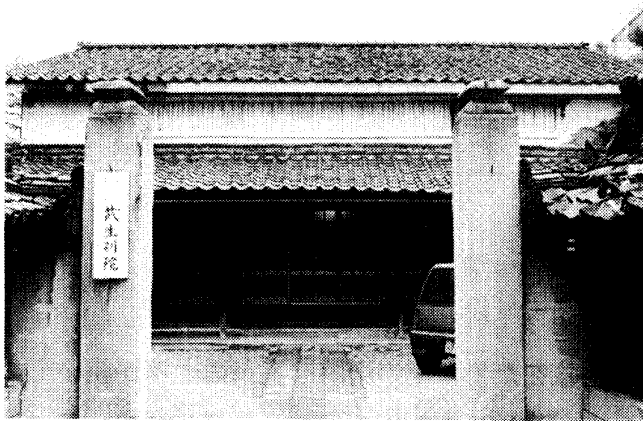


写真-1 正面外観



写真-2 北面外観

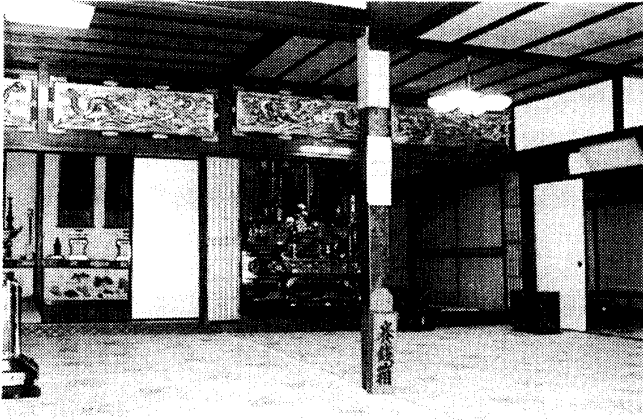


写真-3 内部（外陣と内陣）

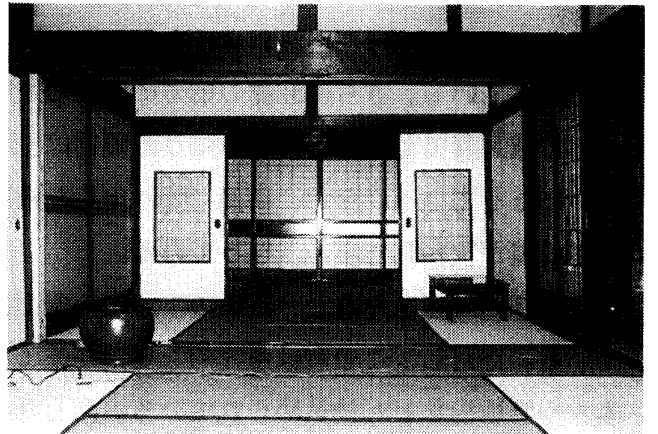


写真-4 内部（北側座敷）

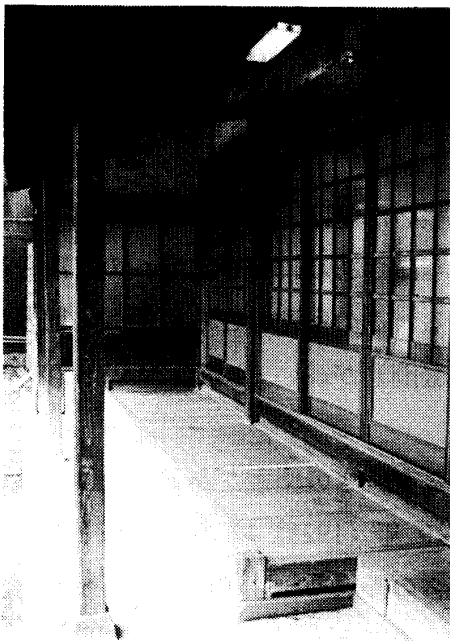


写真-5 正面入り口（上り縁）

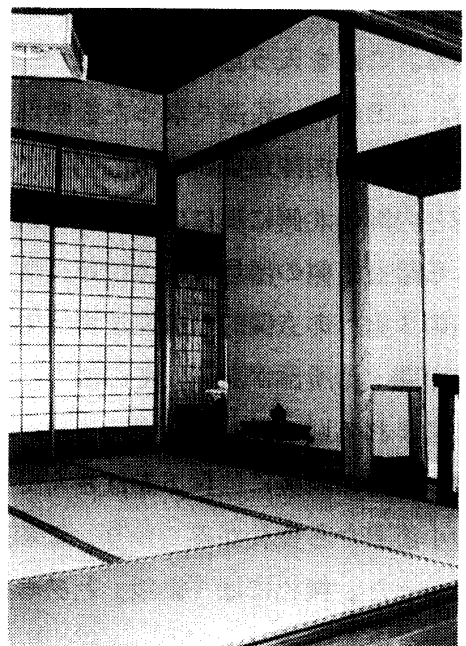


写真-6 大正9年新築の御殿

武生市の歴史的建築(1)掛所の前身建物について

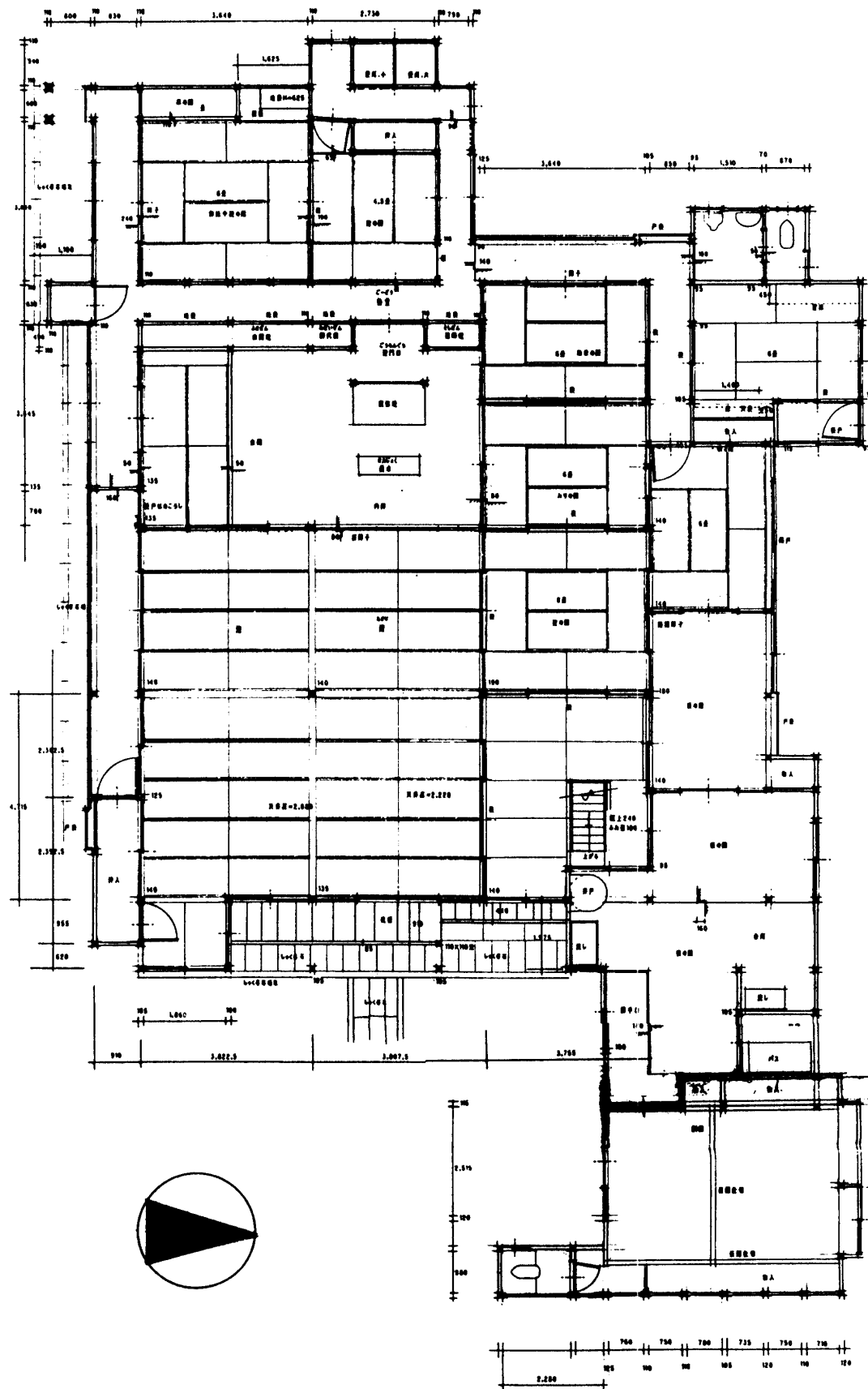


図-4 掛所の現状平面図(村上幸雄氏作成)

4. 前身建物について

1) 創建当時の部分

上にみたように、現在の建物は仏堂としての平面構成をもっているが、柱などの部材に数多くの増改築や改変の痕跡が認められ、元来別の用途であった建物を転用していることが伺える。今回の調査で得られた成果を踏まえながら改変の様相を考察し、この建物の創建当初の状態を推察してみたい。

まず、内陣の西奥にある8畳と4畳半の2室構成の座敷部分は、すでに述べたように大正9年に新築された部分である。

主要部については、桁行は現状と同じく6間であったとみてよい。梁間については、南側4間分は、内・外陣境から半間奥（西側）の柱筋の上方に架かっている梁が当初からとみられる登梁の尻を受け、しかもそれから2尺ほど先に漆喰壁で塗り込められた旧屋根の軒先がそのまま残っている。したがって、現在の表側の柱列から内・外陣境から半間奥の柱列までの5間が当初の梁間であったことがわかる。これに対して北側の2間分は、登梁が内陣・外陣境からさらに1間半奥まで延びている。この状態は当初からとみることができるから、北側2間分は西面の屋根をそのまま葺き下ろして、元の梁間は6間であったと考えられる。したがって、下陣と内陣の北に接している表側からの3室は、当初から存在していたことになり、逆に現在の内陣部分は後に増築されたことになる。なお、内陣が増築された時期は明らかでないが、この建物は明治11年（1878）～同13年の間は福井公立医学所福井病院の武生出張所に当てられ⁽¹⁵⁾、その後、毫摂寺の武生別院になっている。そして、毫摂寺では本山19代善祐上人（1739～1817）の代に府中泉町（現在の元町）につくられた道場が武生別院の始まりで、明治11年1月に蓬萊街111番地に移転し、さらにそれから10数年後に現在地に移ったと伝わっている⁽¹⁶⁾。したがって、この建物が別院になったのは、明治中頃から後半にかけてのことで、内陣の増築もその時なされたと考えることができる⁽¹⁷⁾。

この他、内陣北隣の西奥の6畳間やその北の6畳間、北西隅の便所などは、柱や鴨居などの造作材が当初部分とは異なっているからやはり後の増築とみられる。そして、外陣や内陣の北列の部屋の北面鴨居上小壁は、南妻壁に見られるものと同様な黄褐色であり、この部分が当初の建物の妻面であったことがわかる。したがって、この部屋の北隣の部屋も後世の増築部分とみてよい。ただし、この部屋の北側から東前方につく下屋部分は、井戸もみられ、当初から土間や台所、炊事場としてついていたとみることができる。

また、この下屋から東に別棟でつながる住居部分も柱などは相当古いが、当初からあったとは思われず、後世に古材を用いてつくられたことも考えられる。

2) 斎藤策順家住宅の可能性

以上のように、現在の掛所の建物のうち、最も古い部分つまり前身建物は、桁行が6間、梁間は南側4間分が5間、北側2間分が6間の建物であったとみられる。下屋については明らかでないが、正面の1間幅の下屋と南面の半間幅の下屋および北東隅の下屋もおそらく当初もついていた

たとみられる。

今回の調査において、棟通り中ほどの小屋裏から「天明五年乙巳歳九月大吉祥」との年紀がある木札が発見された⁽¹⁸⁾。様式的にみて、天明5年(1785)9月をこの前身建物の建築年代とみなしてもよいと思われる。

ところで、この前身建物が言い伝えのように藩医、斎藤家の住宅であることを明示する根拠はみつかっていない。しかし、前述のように幕末～明治期にはこの地は斎藤家の屋敷であり、この建物が斎藤家の住宅であったことは十分に考えられる。そうなれば、先に述べた寛政9年『本多家家臣録』にみられる藩医斎藤策順の代の住宅とみなすことができるであろう。

5. 藩医の住宅

1) 外観

以上のように、現在の掛所の建築の主要部分の前身建物は、確証はないものの天明5年につくられた藩医、斎藤策順の住宅であった可能性が強い。図-5はその推定復原図である。

この建物は桁行6間、梁間が南側で5間、北側で6間、屋根は切妻造で、棧瓦葺、正面と南面にそれぞれ1間幅、半間幅の下屋をつけ、北東隅にも下屋を矩折につけていたとみられる。外観はほぼ現状に近いものであったとみられ、2階壁面は白漆喰大壁で、軒裏や妻側のけらばも壁で塗込められていた。そして正面2階壁面には幅4間に虫籠窓がつき、特徴的な外観を呈していた。なお、この虫籠窓は先に触れたように北寄りに半間ほどの開口があるだけで、ほかはすべて目暗窓であった。

2) 平面形式

外観に比べると、内部にはいくつか改変がみられる。住宅を仏堂に転用しているから止むを得ないことであるが、それでも基本的には住宅の様相をよく留めている。

全体的な平面形式は、東北の一角に土間や炊事場をもつ、3室が2列に並ぶ6室構成を基本とし、西面の北よりに1室の座敷が張り出していた。

各部屋についてみていくと、まず、現在、36畳の外陣は、柱に残る痕跡からもとは表側の10畳2室と奥側の8畳2室の4室が田の字型になっていた。内法高はもとは約5尺9寸で、部屋境は襖がたち、内法長押が廻っていた。現在みられる内法長押には端部が切られているものや取り付く位置が変わっているものもある。表側南端の10畳間は南面東よりの柱間に落掛がそのまま残り、当初はここに床がついていたことがわかる。その西隣間には付書院がついていた可能性が強い。さらにこの部屋の東面北寄りの1間半の柱間には突き止め溝3本引きの厚鳴居がみられ、もとは式台のような出入口があったと考えられる。また、二階の床は、この部屋とその奥の8畳間の上方が2尺ほど高くなっており、当初はこの2室の天井が高かった。そして両室境の内法上に欄間がついていた痕跡もみられる。

これに対して、北寄りの桁行2間分は、表側が玄関で、西奥の座敷や北隣の土間や台所に通じていた。この部屋は現在、床張りであるが、表側南よりの柱間に床より5尺ほどの高さにかかる

眉材に入口を示す痕跡が認められ、高さから判断すれば当初は床がなく、土間であったとみられる。その奥の部屋は玄関の上がり口で、西奥に張り出す座敷とつながりをもつ部屋であったとみられる。

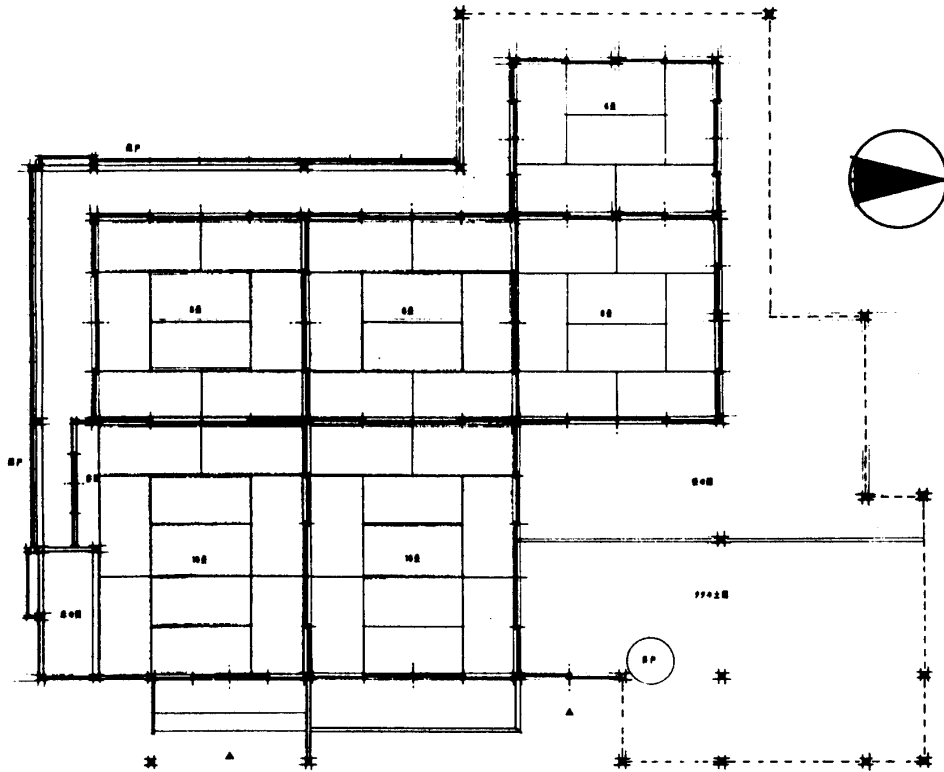


図-5 掛所の前身建物の推定復原図

3) 構造形式

屋根裏の梁材や小屋組の材には古材を転用したとみられるものが多いが、構造形式は当初のままと考えられる。棟通りに2本のやや太い柱をおき、小屋裏の梁を支えている。そして小屋組は梁間方向に架かる梁に束を立てて母屋・垂木を支える和小屋の工法と表と裏から架け渡された登梁を用いる工法を1間置きに採用している。

本来、和小屋工法は日本古来の寺社建築あるいは武家住宅に広くみられ、登梁工法は町家建築に一般的にみられる。幕末から明治期になると、このように両工法を混用している例もみられるが、この建物は比較的早くからこうした工法を混用している実例とみられる。

4) 他例との比較

藩医の住宅の現存例はほとんど知られていないが、福井藩の藩医橋本家の住宅については、すでに舟沢茂樹氏が紹介されている⁽¹⁹⁾。図-6がそれであるが、母屋の建坪が40数坪で、他に13坪余の表土蔵があった。母屋は2階建てで、1階に10畳の座敷と7畳間、6畳間がそれぞれ2室づつ、その他に薬局、女中部屋もみられる。また2階に10畳の座敷があり、門脇の表土蔵に15畳の座敷と6畳間2室がみられる。

母屋2階にも座敷があることや10畳間など3室の部屋をもつ表土蔵があることなど、斎藤家

住宅と違っている点も多いが、斎藤家住宅の母屋も下屋を含めると、ほぼ 40 数坪であり、部屋数も似通っている⁽²⁰⁾。

また、明治 20 年出版の『福井県下商工便覧』⁽²¹⁾には、産科外科・開業医として武生蓬萊町の回生堂・澤崎臨外の建物（図－7）が掲載されている。この図の建物は、妻側を正面にとする妻入りであるが、軒裏やけらばが塗込めになっていることや正面につく下屋の様子など斎藤家住宅と類似している点もみられるであろう。

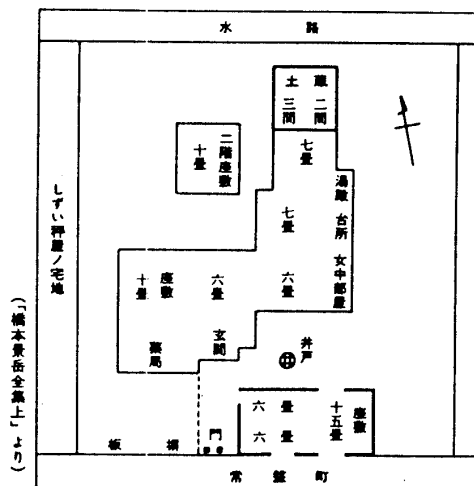


図-6 橋本家住宅
 (『福井城下ものがたり』より)

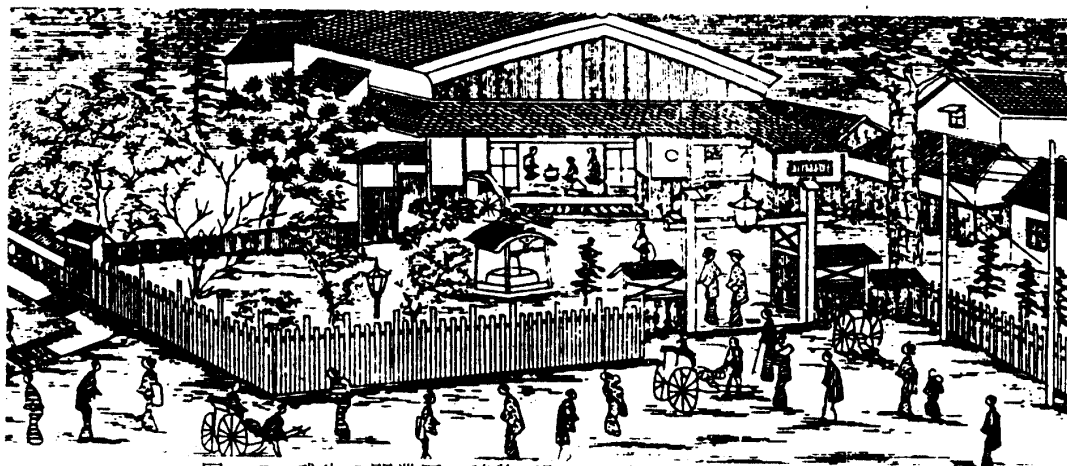


図-7 武生の開業医の建物（『福井県商工便覧』より）

6. おわりに

以上、真宗出雲路派本山毫摂寺の武生別院、掛所の建築調査を通してその成果を報告してきたが、次のような点を指摘できる。

①現在、掛所があるところは、正徳元年や文化～文政期の城下図には「侍屋敷（舗）」とある。幕末から明治期の記録や絵図によれば、ここは府中本多家の藩医であった斎藤策順やその子修一郎の屋敷であったことがわかる。確証はないものの、斎藤家が藩政期から変わらず、ここに居住していた可能性も十分に考えられる。

②この建物は現在、仏堂に転用されているために随所に増改築や改修の跡がみられるが、建物の主要部は前身建物の状態をよく留めており、創建当初の状態をかなりの精度で復原することができる。

③掛所の前身建物の建築年代は、天明 5 年（1785）9 月とみられ、斎藤修一郎の先々代の斎藤策順の代につくられた住宅の可能性が高い。そうなれば、最近取り壊された旧大井家住宅（文化 4 年 1807）よりもさらに古く、武生市内に残る最古の住宅建築としても貴重な遺構になる。

④これが斎藤家の住宅となれば、こうした藩医の住宅遺構は福井県のみならず、全国的にみても稀であり、この点でも注目される歴史的建築といえる。

(註)

- 1) 斎藤嘉造『たけふ歴史探訪(上巻) 丹南史料研究第四集』平成9年
- 2) 註1と同
- 3) 経王寺所蔵「府中御城下絵図」
南北338cm、東西190cmの大図で、図中に「正徳元辛卯年五月日」の年紀がある。
- 4) 藤田三郎家所蔵「府中城下絵図」 南北201cm、東西108cm
年号の記載はないが、図の内容から文化12年～文政5年ころと推定されている。
- 5) 註3掲載の「府中御城下絵図」の注記に「一、此度改之間数六尺三寸竿を以積也」とある。
- 6) 武生市図書館所蔵
- 7) 『武生市史 資料篇 人物・系譜・金石文』昭和41年 p177 斎藤修一郎の項
- 8) 武生立葵会『嘉永四年 府中全町家順記 武生立葵会資料第一集』平成7年
- 9) 註1と同
- 10) 註7掲載『武生市史 資料篇 人物・系譜・金石文』p108 斎藤策順の項
- 11) 註1と同
- 12) 貞享3年(1686)『御禮之次第并御半減之一件』(『武生市史 史料篇 府中藩政并本諸記録』昭和43年所収)には「御医師 内海玄高」や「小児医師 山崎壽山」はみられるが、斎藤姓の医師の名前は見当たらない。したがって、斎藤家が本多家の藩医になったのは貞享以後のこととみられる。
- 13) 毫摂寺所蔵の図面に「余間」とある。
- 14) 「 大正九年拾貳月拾五日
御殿新築棟梁 山本新三郎 高木友吉・山本新吉・山口源次郎・山口長松・谷口嘉蔵・土田清」
「 大正九年拾貳月拾五日
御殿新築棟梁 材木三田村義秀・車力玉村典八・瓦池田松蔵 大塚與蔵・坂口與三郎」
上記の2枚の棟札がある。ともに裏には世話係りの人名がみられる。
- 15) 『武生医師会100年史』昭和63年 p41～43
- 16) 毫摂寺からいただいたメモ書きによる。
- 17) あるいは明治11年～13年の福井病院武生出張所時代に現在の内陣部分が増築されていたことも考えられるが、それを示す痕跡や確証はない。
- 18) 小屋裏から発見された木札
(表)「天明五乙巳歳九月大吉祥 金胎一體両部靈妙神道加持 急急如律令造宅栄耀鎮護処」
(裏)「法印権大僧都 学勝院慈望敬奉」
- 19) 舟沢茂樹『福井城下ものがたり』昭和51年 p142
- 20) ただし、橋本家は福井藩、斎藤家は府中本多家の藩医であり、扶持も橋本家は25石5人扶持に対して斎藤家は当初3人扶持、後に8人扶持に過ぎないこと、あるいはつくられた年代などを加味しながら比較検討する必要があるであろう。
- 21) 川崎源太郎編集・龍泉堂蔵版『福井県下商工便覧』明治20年(武生ルネサンスが平成6年に復刻出版)

(謝辞)

本稿の作成に際し、掛所の毛利和義ご住職ならびに世話役の大塚保二氏には調査のたびにお世話になった。また、毫摂寺の藤 光永御門主および録事高橋良治氏には武生別院の諸史料のご提示をいただき、貴重なお話もうかがった。さらに経王寺さんには同寺所蔵「府中城下絵図」の閲覧に便宜をお計りいただいた。この他、福井県建築士会南越支部や武生ルネサンスの方々にも調査や資料の提供にあたり、多大の協力を得た。末尾ながらこれら各位、諸氏に厚く感謝申し上げる。

(平成11年12月6日受理)